

昭和57年度
(1982)
第22回大会

男子優勝 札幌藻岩 女子優勝 札幌清田

【 専門委員長 寸評 】

団体戦、常勝、札幌藻岩、札幌清田に他校がどのように挑むのかが興味の的であったが、いずれも練習量の豊富な藻岩（6連勝）、清田（3連勝）に凱歌が上がった。

男子はパワーのある肥田を擁する北広島に期待がもたれたが、初出場のせいか力を発揮できず、伝統の札南に敗れ、南もまた得意とするダブルスがつぶれて優勝の望みを断たれる。

女子は昨年にひき続き清田、藻岩の決勝であったがダブルスの固い清田に及ばなかった。当番校の静修は佐藤のねばりがもう一つ足らず決勝進出ができなかった。

この中で男子の釧路湖陵、女子の室蘭大谷の進出が特筆される。新しい波の今後の発展を期待したい。

個人戦では男子の藻岩勢の圧勝であった。昨年よりパワーを身につけ、ここ数年で最強のメンバーとなっている。ただ全国的に見た場合、奥村はともかく、他については攻撃のはばを身につけてほしい。徳丸、西股は2年生なので今後を期待したい。

女子は佐藤（清田）、土佐（静修）がほぼ互角、ただ両者とも攻撃パターンが一つであり、どちらが主導権を持つかでゲームが決まるのが気になる点。佐々木（札手稲）はよくここまで健闘した。ダブルスは清田勢が圧倒したが、なかでも1年生の佐藤は勝負度胸があり今後が楽しみである。

【全国大会】

藻岩が最強のメンバーを持ってベスト4入りを目ざしたが、第4シード関西にわずかにおよばず長蛇を逸した。奥村は第7シードの宗高を一蹴し、ダブルス、シングルスに興味もたれたが、いずれもあとわずか、押しきれず惜敗、勝負度胸の差というべきか。

女子はクジ運にも恵まれたが、北国の強豪、新潟青陵を倒し、2度目のベスト8に輝く。S2の工藤の健闘が目立った。準々決勝の玉川戦は相手に飲まれた感じ。もう少し思い切っても良かった。

個人戦では奥村のベスト16入りが目立つ。とくに宮重（早実）、二本柳（柳川）など

実力の高い地域の選手を破っただけに特筆される。ただ、ダブルスの早々の敗退は予想外。確実な攻めをこれから作ってほしいところである。女子は単・複とも良く健闘した。上位にあと一息というところであるが、ややともすれば強いチーム（選手）にあうと単調になってしまうのが欠点、早い攻め口をどうつくるかが今後の課題であろう。

（ 専門委員長 亀山 省吾 ）

優勝のよろこび

男子 札幌藻岩高等学校

我々藻岩高校庭球部は、6年連続全道優勝を果たすことができ、全国大会へのキャップを手中に収めることができました。過去に札幌南高校が5年連続優勝を果たしていますが、この記録を塗りかえたことの喜び、テニスをやってきて良かったという充実感が、心の底でくすぶるわうに湧き上がっています。

我々の学校は、創立10周年を迎え、一つの節目に来ています。先輩たちのがんばりが伝統を築き、それを私たちががんばって引き継いできたように、後輩たちには先輩たちのためにも、自分達のためにもがんばって連勝を続けてほしいものです。

一回きりの優勝はたやすいことですが、何年も続けて勝つことは、難しいことです。苦しさに勝ってこそ、その喜びは大なるものとなります。やがては負ける日がくるでしょうが、どこにも負けず練習を積んでいるのだから、「負けるはずがない」「負けられない」という言葉を胸に頑張りたいです。そして、優勝の裏には、いろいろな人の何らかの力添えがあり、感謝しております。

この3年間で学んだことを、よき思い出、心の支えとし、人生の優勝に向かって頑張ろうと思います。

（ 札幌藻岩高等学校 主将 成田 浩樹 ）

優勝のよろこび

女子 札幌清田高等学校

57年度、インターハイ北海道予選決勝。

私達は、念願の団体優勝を手にすることが出来ました。今年のこの大会以来、「めざせ鹿兒島」を合い言葉に、厳しい練習を重ねてきました。

決勝開始のコールを待つ間、3年間のいろいろな想いがかけめぐり「必ず勝つ」と言いきかせておいたものの「いよいよだ」と思うと、とてもじっとしてはいられませんでした。決勝戦・・・やっとの思いで3-1で取りました。同じ目的を持って頑張ってきた仲間の嬉しそうな顔を見て、「やったんだな」という実感がやっとう湧いてきました。本当にみんな良くやったと思います。これは皆の力もさることながら監督である緒方先生のご指導のお陰と思い、感謝の気持ちでいっぱいです。

インターハイでもベスト8という成績を収めることが出来たことに深い喜びを感じま

す。来年も、再来年も、私達の後輩がこの喜びを経験してくれることを願ってやみません。
(札幌清田高等学校 主将 佐藤 明子)

全国高校総体（第72回全国高等学校庭球選手権大会） 鹿児島

8月2日～8日 鹿児島県立鴨池庭球場 鴨池緑地公園